

江戸期の「みさき道」——医学生関寛齋日記の推定ルート—— 橋本 幸雄・鈴木 逸郎

長崎半島の南端、脇岬の砂洲がきれいな海水浴場のすぐ北東谷に「みさきの観音」と呼ばれる、アーチ型石門のある曹洞宗のお寺があります。このお寺は和銅二年（七〇九）行基菩薩が開いたといわれる古い寺です。江戸時代に再建された本堂にある十一面千手観音像は国指定の重要文化財であり、本堂の天井に描かれている一五〇枚の絵は長崎の画人、石崎融思、川原慶賀等の筆で長崎県の文化財に指定されています。

脇岬の地は鎖国時代を通じ海上交易の要所で、風待ち港であったので、観音寺は長崎の商人・町人・遊女や唐人からも信仰が厚く、行楽を兼ねた観音詣でが盛んに行われました。

この参詣の道が「みさき道」と呼ばれ、一面には異国船の防備や「抜け荷」の時にも利用されたようです。

江戸時代の諸国道図や実際に野母崎徳道に残る文政七年（一八二四）の道塚を見ると、長崎から野母または脇岬までは七里（約二十八km）の道です。しかし、文献が少なく現在では道路や交通手段が急激に変わったので、こ



江戸期の「みさき道」推定ルート

弟子となりオランダ人医師ポンペに蘭方医学を学び、後には阿波徳島藩の典医などを勤め、晩年は北海道足寄郡陸別町に渡り、長男とともに未開の地の開拓にあたり、八十三歳で亡くなりました。

今から一四四年前、「関寛齋」が日記を残したことにより、現在「みさき道」が解明できることとなりました。彼の記述を私たちに三和史談会とみさき道歩会が実地で検証しながら、現存する十二本の道塚を手がかりに調査した結果が、別紙の『江戸期の「みさき道」推定ルート図』です。

このほか参考にした資料は、①安政・萬延・文久年間の南佐賀領各村地図及び街道図 ②国土地理院旧版地図 ③真鳥喜三郎著「ふるさと地名の研究」などです。

ここで関寛齋が歩いたと思われる推定ルートを、現在の地名で大まかに説明します。

文久元年（一八六一）四月三日（往路は深堀を迂回する）
（寄宿先高禪寺出発 大村町か）——十人町——石橋——二本松神社——弁慶岩バス停——高比良園芸（源ネン茶屋）——ダイヤランド——大山祇神社（鹿尾川を飛び石）——土井首小——江川河口（間路と渚 二本の橋渡り）——記念病院（以前は山鳥越峠）——御船手——深堀——女の坂古道——大籠新田神社——平山台上——国道蚊焼入口——茶屋跡・蚊焼峠——徳道——ゴルフ場内旧町道沿（喪失）——延命水——高浜——古里——堂山峠——観音寺——脇岬（脇津客舎泊）
同四月四日（帰路 野母に行き堂山の西を通る 長崎道回り）

（脇津客舎出発 脇岬）——野母（北風強く出船なし）——深浦口——出口——南越——古里——（高浜から平山台上長崎道分れまで往路と同じ）——平山——竿浦——土井首中裏——土井首小（往路の道に合）——以下往路と同じ

道塚は岳路海水浴場前バス停下に、なぜか一本だけ離れてあります。私たちは「みさき道本道」のほかに海沿いの「岳路みさき道」があったのではないかと推測しました。蚊焼西大道道塚から分岐し、蚊焼——岳路——黒浜——尻喰坂——以下宿——高浜手前延命水で本道と合流する古道のルートです。集落を結ぶ街道があったのは当然です。

ただ徳道からはゴルフ場となった二ノ岳南に行く岬木場回りのコースがあったか、集落間の生活道は通じて、遠見番所がある遠見山を参詣の道として利用されたか、文献や道塚がなく何ともいえません。

なお、調査に関連し大久保山から戸町岳に残る佐賀領・大村領の藩境塚三十三基（天明七年）が見つかったほか、貴重な史料となる蚊焼村図（萬延元年）、深堀森家記録（明治二十九年）等の存在が確認されたので報告し

の旧道にはいろいろな説がありますが、ただ、推測されるのは八郎岳の麓から半島の山を南下し、いわゆる深堀あるいは平山から野母・御崎へ通じる道が昔の街道筋だったということですが。

それにしても山道の距離は長く、峠越えがあり、長崎を朝早く出立しても脇岬に着くのは夕方、一泊二日の旅となり船便も利用されたようです。さらにこの道には現在十二本の石の道塚が現存し、観音寺境内には天明四年（一七八四）「道塚五拾本」と刻んだ標石があり、この石には、かつて魚市場や雑物替会所があり、海産物を多く扱った「今魚町」がこの石の道塚を道筋に立てています。

ただし、現存する道塚は各所に点在し、刻面の文字、設置年、そして石の大きさ・形状・材石はさまざまです。道塚の五十本を設置するためには数年はかかったと思われ、その間には道筋の変更や今魚町自体の状況の変化もあつたと考えられます。

このため、はたして道塚の五十本全部が本当に設置されたか、また観音寺にある道塚が道筋の五十番目の道塚にあたるかと考えると疑問が残ります。当時今魚町が設置した道塚は、現在三和行政センター隣の農水産加工品販売所「みさき駅」前に移設した一本がありますので、現物をぜひ見てください。

景勝の地である脇岬の事については、天明八年（一七七八）脇岬を訪ねた有名な文人・司馬江漢や、文化十年（一八一三）来訪した修験者・野田成高の日記が残っていますが、最も参考となる文献は、『長崎談叢十九輯』に収められている林郁彦稿「維新前後における長崎の学生生活」（二一〜二二頁）です。

これには長崎医学伝習所生の「関寛齋」という人物が、文久元年（一八六一）四月三日から四日にかけて仲間三人と脇岬観音寺に詣でた日記が紹介されており、簡潔な文章の中に具体的な地名、距離、方角、風景描写が当時としては驚くような正確さで記されています。

「関寛齋」は天保元年（一八三〇）千葉県東金市生まれ。ヤマサ醤油の主人の知遇を得、長崎医学伝習所にきたのは三十歳の頃です。松本良順の

ておきます。（連絡先 晴海台町四五―四 八九二―〇八三〇）
（みさき道歩会）

風信

○八月九日、長崎の人達にとつては忘れられない日である。更に今年はその六十年忌に当たると言う。「平和祈念像」に、ひたすら平和である事を祈りましょう。

○最近、長崎でも東京の大江健三郎先生や梅原猛先生方が提案された「九條の会」の長崎支部が発足されたそうです。良い事だと思っています。

○ここ数年、毎年七月・八月の土曜の夜から日曜の朝にかけて近くのお寺の本堂から、子ども達の元気なにぎやかな声が聞こえてくる。これは市内の小学生が一泊研修会に寺の本堂に集まってこられるからであると言う。その声を聞いていると何かたのしい気にさせられる。

○八月は国土交通省主催の「道路ふれあい月間」である。今年も本会では国土交通省の趣旨にそつて長崎港口の女神大橋の見学、吉田松陰が歩いた平戸街道と国道を対比しながら歩き、道路について国土交通省成沢課長を中心に研修をうけ、午後六時長崎に帰着した。

○今月は次の三冊の本の寄贈を受けた。

- 一、西日本文化協会（福岡市）協会誌四二二・瀬野精一郎先生「足利直冬」他九編、副題に「人と歴史と自然への多様な視点」とあつた。
- 二、九州歴史資料館「研究論集三十」には橋口達也先生の明器銅戈考他六件の論考と、資料紹介として福岡県立朝倉高校蔵出土祭祀資料があつた。更に巻末には研究論集目次あり大いに参考になった。
- 三、長崎文献社より、布袋厚先生著「長崎石物語」。新しい長崎史研究書として座右に置かれることをお勧めする。（長崎文献社刊・一六八〇円）

○九月一日は崇福寺の中国盆（普度）最終日であり、夜七時頃より行かれるとよい。

○九月の「ながさきの空」（二七八号）は十月七・八・九日の「長崎くんち」の資料として、恒例により越中先生に「長崎くんち今年の見どころ」を執筆していただく事にした。（九月二十日頃発送予定）

